# 河海抄

常夏 行幸
篝火 蘭
野分 槙柱
十一

へ利12
1272
11

[illegible]巻第十一

正六位上物語博士源惟[illegible]撰

[illegible]

京中名物記に 釣殿 今は津[illegible]

[illegible]

康保三年閏八月十九日の記に遊[illegible]右近衛[illegible]

[illegible]五十人東夜西河[illegible]西河[illegible]

河[illegible]の鮎[illegible]

[illegible]鮎[illegible]言納[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]

# 河海抄巻第十一

正六位上物語博士源惟良撰

第十七　玉鬘　並也　常夏

未注
るこしこれにこそありしきまとみくまれなきねとやらう哉

いとあつき日ひむかしのつりとのに出給て

一　京中名所記云　釣殿　今ハ六條院之也

にしかはよりたてまつれるあゆとまへにててうし　調

康保三年閏八月十九日御記云遣右大臣書使廻於法
如其五六条及西河皆豁此海入西河桂川東
河賀茂川也此西河の鮎と供ゝ御くる夏衆令
ありハ鮎の泊のさ書ぬよハ鴨の大盛數と思黄鷺とく

大臣御下
井寺也庵丁譜り大理

いとやすからぬハにて西川ハおよまよはつくハ井すくん

(大和物語)賀茂川の瀬にやと聞ぬ奥なりて行てしらはくと尋ねて侍りや
(六帖)君ませば御もとをかも川の瀬にやと聞のやるかたもなく
(同)あふ事のなかりし上をかもにあらぬ聞わたりくとも上にあひて
ちりきえのみぞなきやといひせうそこ(逍遥)し給ふに
石川小貝 鯉 都 鯉 同
六条京ちるき川とい賀茂川也東極川と云説あまた
も東極川と六条の下まで上古より今も
一 東にて上六条院の字にて東大臣の六条にして模を
ある院は院のちよい亭子院にて給ふく醍醐天皇行幸
なさるまで伊勢物語にしかる君のかへりいまし
君はしそうの賀茂川の水には六条まさりまさ
とにもおとし給く住給ひ宮わとにり在らるき
川を賀茂河の御種よし

御記云延喜十七年三月十六日参入六条院院亡故
大臣源融朝臣宅也大納言源昇朝臣奉おくり
おほくさしいりのみかへりをいへるとかへりての流れまゐりきつ
亭子院仁和天皇八十三年夜五月遠江国司婢
河原院は仁和天皇二年甲戌に造りたるを以て蟾蜍
一 日本紀竟宴として酒を漬して用ともり以水本例
さしまれは 早速とかき川
せうれはえなきといへるかへし きそか
(古今集)兼人歩はおもしろみぬる蝉の人のはききりなくもなく
水の上屋しもやきふのあつかひさるし(古記)いのつきはなくるさ
世乃人やまて
清少納言枕草子に住たる撫子をいさにとあつて こと
おもひきりしかくぬかりけり 常綴

いかなれはかくしも義はあるそといひけれは
曾参は内大臣義を知てあらすへからすとなむ申しけれは
けれは桃仙といふもの義とは何そと申は人とまりにて
やまとのうたはこゝろをたね
人のたかとの行をとりわきかはり給へと申こせ
家損　家のことをうしなひさせしむ　事理　に年紀
いとおほくつくれはことくるへからむと志めてあつかるたまふ
大かたをうちつきあるへし
雁　父母　兄弟　次第ある列をなして次にすゝむ
群集　行列するをいふへし
るいをもつねにはなれかたく兄弟わかれかたきものなり
いとうるはしき
此ことくすゝみて后をまもる月のくもりなきやうなれはそか

行人にし
たのくにあるふみをへそはし
東を経給大臣太道のかたまひとありて早歳の暇
ありていて出さらん女房のいつてうらうへきと源氏なん
思ひさまれけるを
物ものしりかくかくさめ人何のためにおもんとみかたて
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　網手のし
祇宮とたのし吉野に志しはしめ内にのしと行しきにいひ鏡光
雲井雁に志婦妹たれる物しるしとこそ
さすらひけるに　有様　心ともかのきれぬまゝ也
ひかきととうしといて知へとて　かたし
いとおかしの人よりておくあるしなり
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　一云
實清　或　贊朴
たのしもきしはいかのとちなるかとを

或ハ聊た道の心し　或人問曰し
養在深閨人未識　細砕　長恨歌　白氏文集
くはしきとし
かうしにふかくの人ちかしぬやまとのことませはなりつ
しくはひのして
牛麦ナラシコ 百業　石作ヤミトナラシコ　金銭　白氏文集
ませ　架籬
ねりぎぬみちつと化してかはりくすりのやけの行へいき
まきてはいくとも侍るとおもひへ文北の丸にあるまて
ろやさ形ん社は称っいてを
よかいへいとつり情あて毎わるとおほゆさこ本まゝ給ふ
じこりせんみされはなふはえ人のあるといふをとっ
せよきん　催馬楽　我家

あんきこえいはまの心ゝくさすりとは上臈しつめく
きうれ
たたかきおもらうしとひとききえんものこきと
石代の野中にはそうしとい松の絲をもけをもしらずして
はかしこきやまとこと葉人のわくみそく
よやまとゝ和漢の名合編し表わりまうてそは只和國なん
来といつりや美文学へふとるか何
とつき　和漢よあり　たよそて入といふをもえ太よりくら　しそくと薪
心のつき　尚書序
ひとのいはおつとふくしてはそと物の数とさすはにしあかれし
和漢はいは侍䓁謙侍䓁冊尊御代ゝ今俗出版ゝ諸楽笑の
寂上よとうしや
おやとおりつさやてよりひきこすみへらん

内大臣とくゝろかはらの上よとありゆきゝは玉鬘君はまゝ
しらひさめうへきぶいまさ露於せうまいうくおやとお
つつきと源氏いろいはせ
ふてひいとにたくいうしかりしおし
ふてひい琵琶柱とりもわ琵琶よゐとひはつさふと
さ弁と以来ほの物氏十巻撥押り乃てそわゝうたと
へ人ふてひいむのとどふせ
一盛渓半の字しわ琵琶の琵琶の字よありとゝ
めさ川の御とのやうたすといとおつしうひたまふおや
さくつまいすうしうるひ給つ、
貫河　催馬楽
めさ川のせゝのやうたしくやさしくにとるよいたく
乃おやさくつし　一段　おやさくつまい悔してあいしやく
庭らきれわらよくいへ人　二段　くりかりせ人かゝ
いのかりきとくへさしうきそうてもわれえそみ
やらよい人　三段
いてひき給へ　塵々　日本紀
ゆう梅え人そわらむの中にてさ琵琶弾人しるきあ
おしかくてこれゞまよりさ行くをとらす人よりさ
想夫恋　平調
文字よつうとと楽そわらう女い憐へとて以つゐ四ケり
節同向来浮子曲義人不導お丈夫　千載佳句
うおはさみ女せん
王女　王昭の女
乃いとしの人のためよいみおむし風もやさしうふそうし
みいるれ人とむくこときなん源氏のわ琵琶しもそ

玉箒ハわか世の慈悲いそくゝのくさ指芝といふ是
さらまれハ見てさへね程よかくもくや玉髪ハ耳か
たくて秋はつくとしきゝいまもすゝめり
末枝ハはりしんくりとの松
冬かへのおやりに出し枝まわりつくしはりいすゝめて
六さしましにとらひとし給て　小井来 川楽
もてくるわいさまひめて
おふあつかな　平　草化
花のはつさきまりつくとも
人ちまあまり由緒の名あるいふし　しくしょうらし新町の人
我もいはりかへちまくとをさいしまし
陰ふふるちもまちわりと思入りしいさいしはりをわ
うつせとハまちの字にはしや

實御子

いつかしぬて　下や
やわすくらたくすとん
した秋いふはわきこゆりのと　出骨
たちあ衣やの時さかしうてねい物忌時のきさいそけける
宮よ北人のそこにはといん作りて
不動尊法師石　慈救呪　下　剱索下　剣刀鞘下
秋さいしま志りしきりいきれそ
秋宜言　。
秋きふとさめくきて人秋うちそはるけさ人森をめあ
なお好さ梅のむのいさとしらあさけはけゆかれて人の
きうかけりきよおくえこ給へるて
あいはをおえし梅の色とら秋もなしと朽くるるしま

とくらはなにてもちよあそしもみくせしらしとこそ　小蓑 松
しるうはとおもしきや
いちはやきにはなれはそころくさ人さ人はりきりとくろくさ
ゆへしやふといはりつゝとみやてらいてすること也いおり
やとり人といとあさへうき御せきり
はきえのすかふ出のえぬうらいはきぬらくしはうる
はとろきたりと
さる名古その吉忠の国よりて今生の客白の好醜はりきこ
蝸正忠序中來ぬとしりさわく近江志うちなに
さとりよおしう孫く侍らんけりうとい一句ん
一流孫ちもたやうき人は飛おきれしこの名もおき
比さまうす出へよつきあるけすうといふん
ゆくいのいとちうきとし忠のはうきとし無

ひさいちうきといいきうへきとし忠のはうきといはく
しきや
てうぬんらし御まてと
ふうとぬとは介ましくたれの家すつ本よまとら
てんとよふのくよふうきうへいたをとすうへきん
一流よいおとくつるよ兄それまう孫く双六のよきてう
ぬ田らして乞たましれとえん
たふの死い　京ふうきわ〳〵也
おはこ　おはつふらおそつらしつつ御すん
前文堂
すふし
水東梅え志うといゆといふ詞にあう志うゆうたちく
といさやしよおりもちてといふ也を発きつれ字とこし

因果く

あさの事とよふり仰しめ　古事性じやわつき のいん

かゝりしのあ（別当）たゝ（大作）くの

妙法寺　在吉田回祈誇東郷ちかつの比寺号　妙法寺村　本号親着し

よしこくもりわうし大うくそしまゐつきみてかたへた

かくしとの給く

若得為人聾盲瘖瘂謗斯経故獲罪如是訥（コトモリ）

あやくといふれてしつさけり申人

法花経と誹りし事ハ罪ふかるゆゑあくとつくへてそえし

うれしきさ日すやいふ色らし

正日といふハ暦まちより中吉日之次の日まらう

さかなやとおりふ給しきむあゝ人ともきしらせ

とありわく郎吾来も信そへ語不手

あと人のかもむひとるまめ中にく

表（ヒヤ）　日中いさうし

かくしあらいしくたみて　遊　孝經

あゆまかて久かおれらくのこいあてみてちぬいくれ

ととすゑあるみいつたとらつきり

り本本　本来のさあらなし

にれのまらつき経よいさつひねういまてゝけてひくら

れあれしも仰ら称くするの開とやするさせぬ人とえん

あつ称ハしもしきし野といへくしミうれと保志こし

やとえんうちにくらよい由もやくわもしけいりきんと

おかふ給へくらハおふふよんねうしや仰人いるやしわや

しれハ入るせ行よとて

人（ちと）あわと出やるにうにうさされまらうかれさあろしれ分さ

（行撰）立かん紙といへりとされとあひよみ角とされはすへからし
寛平御時の御くしおろ存せ給ての後こす出めくりけるに
人は作者をはてらふしたう存せ給へさりされ小八條の息子
のよめる定也
あひ見ていはすてみせやしえへしおそれ守よおひよくつれく
ものねもしまさしりといへくりこわるりやすこそは業の也
てんちといまへんのましつてけしくあさ姿ん
（枕草子）はかなきめくまず田の池の秋なおはれいとふしくおる物そさけり
（六帖）あしきてと枕にさ母よえるせりうこのまくらの枚すとしとも
くさわるといふらぬ海のいときれいとあひ人たこのうなと
蜻蛉日記にはいし山よまいりて海そいてきれ出つきぬされ
冬といふ東は見るに見りて
枕はふれのと

（方）丈りしめてあやかいの是入夜侍の冬とに入りてまれなる恋やん
あすなりは　これはよしも本業の御ん
くしさ海よまうかいてそ秀もりわぬつくりをると
とこ代しの中人まの清息は被うきと枕あて　又年
作る事や九條の下為ん地中古の仮名清息ありとうかゆ
り裏と枕なあてかけるなりしる也
まてしこの花よつけて
文とは紙の文の成けり作る手にくさいはしあるときさき
しとおちしこの花よつけさしぬ中いかり手ん走久
みちしこれはさう葉の文たまうん
いとまし
厠長女洗女しくてみるさ根の物ん行幸の供奉は
ともく

せんしやうさめいでくるいとおもしろん

作書の事く

いさらなるすゞりの海のすゞしの渕よ波さらいでよくこそ秋

一句明呼の是く

まつみるいさしれ　立ゐさらし

いとあまくなるかなきかれ

寒のこれさらい南の下木の事くのあまへさてかて

へいらがゝ物いとあるくへいつきて

粉　白氏文集　面子（メンシノカホツキ）　荘舞（ホツキレンセントヘニアカニシテ）　遊仙窟

こまりし兒女子の氣粉し

玉巒　並五　篝火

巻名　さり火よりも思ふ意のまゝりいう
世よい角しをのかのとうりまり

る風をもて吹出でせこう夜さうしさいしさんらしやは

六帖　る風のをもて吹い拂せこう夜の(…)のうそさひしさ

いとまくしまうれ

教　ひしのなく

たきゆのをとしやくしあらはれいすら狂とゆくかり

ゆまへのかゝり火　篝火　鈴　カヽリ

なとなまえ　大とね監　叙爵あそらし

よせられ木のあさよりまつかゝりしうりは

松炬　タイマツ

いにしへもかやうあゆみてしたくらしれあさましきかりに

夜まわく宿をうるとうる庭の火にいにしへをわかるまさりまよせん

風の音姉よかくまわりさしそいてうゝか志の秋よ

楚思　淼花雲水冷　高韻清晰篝續婸

妹よかゝてやるかいさやくい吹のねをも風の音ふむ事かりのわかる

風の音始めてきく久しれあまたあらん人かはる風たち
ゆゝしときいて、
和琴の手ゝ次調よりといふ中ねに極つきの秘事をよみわらひ、
おもしろしとおもひくおもしろすとあり 段内大臣
和琴のことをかくよむといへり

玉鬘
七並六
巻名　　野分
常夏始終　篝火のこと
うけかくろきおりきれませ ゆひませつ 架
風流をんなし
緑園弁枕去ませと志かといふく
露れりわとせのつ秋すとまとみて

うつせみしきぬ中をもかれむさえてや春とかくらえ
美妹のあをひたりしを始めとす人はかとさり
さりけると
万葉集とて天智天皇詔内大臣藤原朝臣競憐春山万
花之艶秋山千葉之彩時額田王以歌判之
冬こもり春さりくれはなかさりし鳥もきなきぬさかさりし
はなもさけれと山をしみいりてもとらす草ふかみとりてもみす
秋山の木の葉をみてはもみちをはとりてそしのふ
あをきをはおきてそなけくそこしうらめし秋山そ
われは
六々論説の奇　こよめし宮
おもしろれみてもこれ其とく　うつ春と始といふ流きまされ
くろめし益

まいらせむ、うちはわのへかよ錦をもかわら好いとさわ
かそいゆきのおほへの　名をよふつく
露たゆとおもふは宿の萬わんをみやいくせさせ給へ　雅正
此物語はいたく萬北にてさをの
又ひさう思しうつろふきしき世のありさまにより
たゝ絶え見えて又物は世中の人のこゝろのもやそをけ　小町
音絶ゆとよしてをるよ所用ようけつうはうつろつは　貫之
一八月大風事
仁和三年八月廿日卯剋暴雨雨剋小風殊抜樹京
中人家顛倒内膳司東檣皮倒
延喜十三年八月一日自申剋大風吹折木破屋
天慶五年八月廿七日大風暴雨如延喜十三年八月一日雨
京破損不可勝計

康保二年八月廿八日大風諸司并　京中破損不可勝計
永祚元年八月十三日丙戌大風出来宮城門舎多以顛倒
大内京人家顛倒破損不一勝計又賀茂上御社并雑舎
石清水御殿東西廊祇園天神顛倒凡一條小屋之新
旧堂東西山寺等皆顛倒
同二年十一月七日改元為正暦依去年八月大風也
八月いこせんくるのわき月なりわく
朱雀院　天暦六年八月廿五日　崩御
先坊倒不動
おかしふりの袖は妹の宮ゆるしいらはしうせわ
おほ宮よおほふりの袖はまたくもと風ありさらし
むつらく
撰進
さけんらうさう給へ遊しも橋よりさらまへ花のつくる物

もとあらの小萩ちりぬくまちこそ風のまつしき
まきめもとあらのこ萩露もを風とまつとしあとよまて
もとあらの小萩といふは年のあわたるまさけるといふにこれは
小萩をそふおかいの萩もわし枝あしこえしくさきおこし
其わか中ある大小あわくらいきれともとあらの小萩とよめり
一説に帰つく如く下葉のちり遠さるともとあらの萩
といふにこ
もとあらの桜ありとも本ありもあらくこえしくさきおこし
かんさくら
朝ことに見れとさいわかおにほこくもつよく桜は
かん桜といふものえしを紅して葉も文紋さこあるものに和名は
朱桜とのせらり古今物語にはからく桜とあり
あんさいはさき風をめり　周章

風まけふいへゆも次あるへきもれけりかわ
景行天皇三年初将討賊次于柏峡大野其野有石長六尺廣三尺厚一尺五寸天皇祈之曰朕得滅土蜘蛛者蹶斯石如柏葉而挙焉因蹶之則如柏葉上於大虚故号其石曰蹈石　日本紀第七　觀凱之啓蒙記曰
零陵郡有石燕得風雨則飛如真燕
已上先賢の人は安くして外には見えぬりまも風の大事に
かくを思ふにはとこ及かはなさしに為るへかる
天文書云月干箕風揚沙
史記　項羽本紀曰　於是大風從西北起折木發屋揚沙石
窈冥晝晦
又衛将軍驃騎列傳曰月且入而大風起沙撃面兩
軍不相見　史記百十一

大王雄風也

文選風賦曰蹷石伐木梢殺林莽
動沙堁吹死灰庶人雄風也
師曠秘決云庶風發屋折木飛揚沙石不出三年五穀
不出兵革縦横民無道路　見天禄四年五月十九日晴明勘文
しはらくをさまりやまし侍まに
寛平御記云八月丙子後昨日暮至今日雨不霽昨日申
一刻大風自艮角吹起寅二剋息但餘吹未除此外
延喜十三年八月一日大風古来粗侍る右今来承りける
大風云々
三条実美公六条宰相よまさしいけられ人をわけいあ自ら
日々謁親王
九条右丞相遺誡云凡非有病患不可謁拝親若故
障子以消息可問夜来之寧否

又云大風疾雨雷鳴地振水火之変非常之時早訪親
次余胡
おくのかた　日本紀
敝屋
しけめ
揚子深浪抄云　白雨　和名安良作末
急雨　比巳川
うらしま　高欄
しけのことも
出籠　蒼語雕籠すゝ侍みて作まり
枝のいかきかすゝめいと　無後也
おしき
雄壮　日本紀

人らしてすゝんねきく　雉
さやかねぬあけくれの花
上の詞は日也屋りくさし出しろおとありいてに又
はきられとありふ寡し一義ニ八月の日卯の半に
出とたりけるに志のれに暴雨後朔重雲未霽
侵霧行晴ゆく人にあきれの空れしくあうし中ぬ又
けりよこ座りたれしさうぬあきれとはふく詞
しなきつまさりてとはり章
拾遺　不知婚文
朔軍日くさしれ志さこ旅まり出やあきれと人のは志ん
志らのふにまおかふられ旅のと
絵傳　薫物一方　これ初の麝香也ましし
やまうい然へゐゆきをらひしやし
まうい詞のたとけしくこすしふなし
鯔や　ねぬ中ぬ史出り
白しおけもし

中ぬのあさけのすまい　朔同秋　一字異　正開容儀　同
ちのやしやはらし
人のおやのちえやとにあら　称わて
ふ然とのあさたかしよ
なまふいとのまろくそけしくて
覧あしあさ也
龍膳　陶隱居本草注云　和名衣末美久作一云
述賀奈味甚苦故以膳為名也
かつきにわらいふやうよ
蔥名苑云　醸傳水　一名洛州珠
和名保々都岐
赤醸傳　日本紀　ホウツキ
つねうきほくくしあらそ　雉
じへの　酉直　三ト上ル　師古曰　理直然也
漢書高紀下

くらこの小子も
日本紀ニ同胞 腹同すこしてはらからとあり 後ニ一腹
の兄弟 但此物語よ一腹ならぬをも兄弟とよめること
ども亦もあり
花いろきりあをきをけらしとへすとも
颯ソラ 文選 潦 同 庭樹以潦落 蒂ニ入
あさ川も 網室
御あころ 年預（後筆述）或調子 年老たる女房也
かそのはかくとれよるさのきめく
ゆきのは絹纏半ん 毛ぬいのつくりのきさい方よつきて まさいかた為ともあへらるゝ事
いまやりいろのにニ多く
ヒヽ様文 紅文也 延喜式ニ紅とヽ様文とそ種文とそえり
御おのつかせたさいの元人にやありぬ

康保三年八月夜の栽家
ゆかゆしろぬきすんまうでとこれ比比といふうちもして
康和文後 ヒヽ頭文絹ん
天暦御記ニ 経積三合並置下机一脚らん上加文後
霞
つもしくしくりぬきさやうの絹小しら
おえら しくしくん
風さのきいしてきしるふ文へ小て
安復風塵 日本紀
さる夕ぬいろきぬいろよらかくぬへ給ふわと
此文様のぬ半・篇木巻よ事同う はかぬ安双ゆん
文こゆこすらにふのて艶書の女みていつるたさ文を
同文の草木うつりはらへるさまろうき此物語の中よと

しるし女巻に源氏所語へしてさしつらねし　紫の紙に
みとは萩をもりつけさせり　鶯巻は五節の文は玉の
枝のもとへ白薄折して菖蒲根に付く若菜は源
氏女三宮への白紙にて文梅に付たり　舟巻は五節の文は舟
のほとへ紫の紙にやりして梅に付けり　源中将は
くさきしれぬ人をゆくさかりの文し紅葉
をけるといへるなれ

小松をとしけるとか

不調　　よろしき事なし

並七　　御幸

うちきらし行ふる世に　雪は、さやふかみの光とぞやたらし

この心をとくしめたまふ

拾遺
かくよく小人のほとせきては　かしかしの題
いかにていよりうらん　かのわれらにれたるすゑのやさ
上の詞よりいとよりて人にくてそよい付合もれけれ経次詞に
うちそいたる　しくれかれくん人のはゝれ合ち付けり
此花あくすなは行幸
仁和三年十二月十四日戊午寅四刻行幸芹河野為用鷹

鶴也

吏部王記云　延長六年十二月五日大原野行幸卯

神上御輿

見吏部王記

すなはち　五條のかはらとにしきめよりまはれ

吏記云自朱雀門至五條路西折到桂河辺上降輿
乗船辞下馬上御輿辞御乗馬渡橋為興方舟其上茨校

自桂河入野口

きよしかみこたちしみかんよにいるくるとこのへ

同記云鷹飼親王二人立幸列　其装束以赤色袍褐

王二人皮敷上以後六位以上着麹塵袍諸衛官人着褐

衣脛巾行騰諸衛服上儀府掌以上着脛巾行騰並

継皮なり　唯脛巾四位五位用虎皮六位以下行多良志皮麻

児皮通用（豹毛皮又用文皮）以上武官着小手為察内舎人亦同諸

衛鷹飼親王二人着地摺布衣皮袴（式用紫末濃文倭袴）小

鶻子餌袋犬鷹飼着豹皮脛巾皮引野ニハ着狼皮

行騰四位以下同大井河行幸

むかしせい　馬副

おとこのかみのきみえいうわれにさきとあ衣上人五

位六位までさきり

一日乃儀式は諸侍着麹塵袍之野行幸时尤方鶏

飼着赤白橡地摺衣太刀鶏飼着青白橡地文摺衣之

由見記鈔ニ見へたり

枕さうしにハ行幸ハ比へてみかとのやまきえんなり。

大鏡云山口へ（延長六年十月野行幸）いらせ給して枕よきせ給なといひしにハ

ゐ鳥とかりなりて興の風のひろういとまりいわりてあ

てりしをはしく日ハ山のたうへりし見れいみくうさし

く山乃狩衣たしまを詩之やうに鷹の衣いとおもく雉

殊青ぬやりよく殊もらのかきく井てハし統衣の

雪のかしらたりてたりうつさる中やいいしとよかかり

おじのおなへをいつきえ行くんとて所りしきそくし

とあけつとや

みこたちんしらかねと匂かにてつぺいひかつまハ

鷹事

仁德天皇四十三年秋九月庚子朔依網屯倉阿弭古捕異鳥獻於天皇曰臣毎張網捕鳥未曾得是鳥之類故奇而獻之天皇召酒君示鳥曰是何鳥矣酒君對言此鳥之類多在百済得馴而能従人亦捷飛之掠諸鳥百済俗号此鳥曰倶知今時鷹之乃授酒君令養馴未幾時而得馴酒君則以葦緒着其足以小鈴着其尾居腕上獻于天皇是日幸百舌鳥野而遊獦時雌雉多起乃放鷹令捕忽獲数十雉是月甫定鷹甘部故時人号其養鷹之処曰鷹甘邑也

李紀云乗輿按行出日華門自左近陣於朱雀門丈門然路鶏人院別當伊衡朝臣朝頼朝臣在將前鷹人茂春秋成武仲源教在之前鷹人陽成院一疋王按察

大鏡云仁和二年芹河行幸日公卿皆着摺衣在前旧記云正五位下藤原朝臣國平着摺衣立列直擁野

らのゆようひかり試由しも成

伊勢物語云仁和の門芹河に行幸し給ける時いまは
ゆうへとにもなく也りもとつきふけることなれは大
れさそひそはりけりて世給けるすりかりきぬのたもとに
かきつけゝる

中納言行平
おきなさひ人なとかめそかり衣けふはかりとそたつもなくなる

諸家鷹飼や

令曰主鷹司正一人掌調習鷹犬事

李記云自桂河入野口鷹飼王云列此於鷹負外鷹飼狩衣武家着青摺衣者四人摺衣者徒洞取之庵從也又諸家鷹飼親王云々摺布衣見上西宮抄云

又如例衛府着弓箭録鷹飼地摺狩衣綺袴玉帯
鶏飼青白橡袍綺袴玉帯老懸有下襲着釼着
在尻鞘云々鷹飼入野之後着行縢餌袋式ア云以
下鷹飼着供奉装束之庭從乗輿之四位以下鷹飼
着帽子觧鷹令韋大列立安福殿春興殿前又云以
下諸衛及鷹飼木装束猶之云々替鷹飼入野之
後解大結大鷹飼者結繋腰鶏鷹結腰底示
鷹飼又同之

せりかはゝのとりころもにおきて
かとりぬとまうしけれはすり衣出のあかりとなりと
すり衣は狩衣之伊勢物語に詞よりてきぬのをそ
ときりて宗とかくやはせのおとこ志のふとすれる衣
を狩人きたりけるにと

輪乃よりき事之
わしよはらぬなんと
御門のわう文乃行れくそまつりて
延長四年十月十九日大井河幸上服赤文袍冠挿深
御袍文行風除時祭庭座賭弓射場始式又朔観
幸後出御木時被用之晴儀之諸衛青衣乃袍を着せる
時は主之赤文の袍を着せしめ給ふ一施乃人文着る
是諸よおもてなる文内宴躬河幸以下時事之
李孔云卯杖上酉與之出装束御赤文袍

うこきなきこころめ
帝泥云 人主之称め山岳霄之る後る不動
夕ニヒト 凡俗 日本紀
あまく人
あめなる人 天人
兵ア日 宮もおほきて

親王任官例　左奥

尾にはひおいて　胡籙

伊勢物語にむかしおとこ程にやなくひおひてけらはより

えぐらくひとらよ見えて　唐子曰文王昔為寅中人

髪毛良人黒文面顧ヒゲアリ　疏曰文王之父季歴生遠

日黒色多鬚ヒゲ

野よおりまてつきそれにてしこそめんくらぬにひとりは

李部後猟亭的は御輿塘を胡籙　親王の笑草

張庭は塘頂眺望下石中去為太檍中為京都

右少為中正を持れ画営釵上階塘路太岳後仲達

作れ前料理鷹人不獲に雉殿上六位昇　俎具厨

子示を御膳れ臺二基蔵人以御盤居膳後

衡賜之饌給後手長益送

六條院より御みき[こいれり]へすゑ火ゐおこしそえまゐるを添り

御酒　御贄　炭　火爐

李部王記云六條院被貢酒二荷炭二荷火炉一具殿上

六位昇之立御前五郎解一瓶雉胴不死供れ死之

むくを求ぬ塩役之

あ人のせうをおつかいそきし一えてこそまゐてせん

付鳥枝事

伊勢物語云忠仁公よゝうとてきゝ雉　九月ばかりにむめのつくり枝に

作枝よ付たり

九條右丞相集に朱雀院より露に付く侍るをせける

とかりさ来る七尺ある善通の梅木より葉せりく

因して表裏よ毛ないかりそと鳥付来て

年内は立枝をへそて雄とれなひけて付　雌なると

さけて付く(?)あけてハ雌をたまわけて付春ハ雌を
賞する也 付様口傳わり思し 式にハ朱を用と云ともまハ梅
枝ハ紅葉に付事 常の事也 むすひと大臣大饗の時用る
又獅(?)官頭雉を人にもたせ作法又雁鴨雉より外の
鳥にハ三四尺の朱の枝を刀目をつけそへて奉るとれ
つらかりて付る一双を付様うつくしきに作る人の口
傳大納言隆賢(?)説朱の六七尺の雌雄一双を付る殿
上膳式によりたてり又大臣家亭元服移徙の時用る
起所(?)にも所ハ根引の小松に付る其松にまた鳩を付る
事あり山鳩也義家朝臣の説にて付る鶉をハ萩露
枝につく小鳥紅葉枝に付る雉をハ竹枝に付る十
月にハ大方(?)朱に付るとこり(?)雁鴨飼式文説之
太政大臣の家あ(?)雉の御事につきまつりものなり

そをこのやうなりけるとも(?)
光孝天皇仁和二年十二月十四日戊午寅四剋行幸芹河野
為用鷹也式部卿本康親王常陸太守貞固親王(?)
太政大臣藤原朝臣左大臣源朝臣右大臣源朝臣大納言
藤原朝臣良世中納言源朝臣能有 左京朝臣行平藤原
朝臣山蔭已下参議已上皆摺衣猟衣依兼和之事
式部卿旧記式付放鷹口語而行事乗輿於朱雀門南輿
御上勅召太政大臣三皇子源朝臣定一臣鴫佩鈎太政
大臣備定鉾(?)興前帯鈎騎乗皇子源朝臣正五位
下藤原朝臣時平持着摺衣午三刻亘猟野於淀河辺
供朝膳行宮在泉河鴨河宇治河之会漁人献鯉
鮒天子令飲大衆門(?)僚(?)諸葛朝臣養守 天子和群臣
以次前謳大納言藤原朝臣起舞未二刻入鶉野放鶻撃

鶴山前放住牛收半水鳥坂上宿祢ム犬献康一太政大臣高上
養之宗興還幸九条門檜作之絶別墅供夕膳之絶
勅叙正五位下太政大臣宇之経緯篇

よし川山みねきつりまつ松原よりかりかりつ仏やれりん

国史云光孝天皇仁和三年五月廿八日辛丑勅山城国
乙訓郡大原野為太上天皇遊猟之地

多ちのかり右
封書式宣ふり見る右に更よおとなりぬやまとはわかなや
今つくをいふかたなく

梅思

すいなさいましとは葉へかくらおほきにまとかれけまよ
まちとりかくれむきのこりていりにきこえ、世ゆかし
楚辞曰世人皆濁我独清衆人皆酔我独醒是以見放

漁父曰聖人不凝滞於万物而能与世推移世人皆濁何
不淈其泥而揚其波衆人皆酔何不餔其糟而歠其醨
又曰滄浪之水清兮可以濯我纓滄浪之水濁兮可以
濯我足 漁父

ぬいはなつたもとりて
まきさらとみてくさのまくすくぬきさとかはとそ 不意
源氏子乃そくぬきことや

内侍のかさのふまうる人なくて
延喜式云内侍司一百十人尚侍二人典侍二人掌侍四人
女孺一百人
典侍但尚侍例

あらかのすき二人又さら人きき人とさ流くやさすると
尚侍従位当麻真人浦虫 文正位上従丸右京人也

弘仁七年任典薬寮建為掌侍天安元年任尚侍
國史云廣井為人貞和子操義誉言未嘗過於人不
知伉儷之道自掌文衛職能於標樂内之礼式
尚侍従三位廣女井女王 嘉祥三年任掌典侍 天安元年任尚侍
尚侍従三位藤原朝臣灌子應安四年正月任尚侍 元典侍
封之冷泉円融三代尚侍也

いとまなくは　宿徳之
わかしやうはまし　孝事
天をとぶかりかねとりて
比翼　在天君之羽翼之母 史記
いかにへけよ松んよかなく
馬息
ありしに海さる仰ありさ海

伊勢物語
出ていなは誰か別乃かたからむありしにまさる今日はかなしも
さしもはげしかりしやからんも
なかひんかりつらきて

中春中旬昼夜各五十刻時正之仍吉日ならん彼岸
斎或之道経曰一切衆生依於二八月斎十方世界一
切衆生離苦於不霊瑞而已乃至彼岸二月八月
八王事合時所得彼岸斎食法
やはらはいかりそめけれとさみなれぬもとはかなり
捨遣　君をたち忘けこのまてにけふまつりにこそはぬ日へ遠
かけはしりの外よりわりかくて
諸事自唐土伝来何事もしけりけれん
文唐より和合たる花も是も此桜扱奏
くさのことかんしきさくに紙ひけり

〻形之

あらくりとやかなとや昔は人のかてたゝしけれはいせの大ゆ

〻落栗色 こき紅也 今様ハ中宮のおき様 うつほ物語にもみえたり

しりまめのしもきりを移てまちのいろもちさき

裳のしたゝかなよりわゝぬ衣をちんきしたことも

もわり

しるてしりかくしなとしてしりのさかなり

しるてはかうひよすとやしりかくとはしりゝそ

りさくるるに文字はよたるんしなり

かゝりも うつほ物語 偉衣 伊勢物語 玄石

いくひの称よ文字なんかん衣をてしうさら見てそ

ろしくるやうにて結りなと

髯 嘲嗤也

伊勢物語にむかし人とうみつくきをなかおりけり

よりかしこと 元用年

とてろしさてもみてあんけり

こよひいとゆかりあへ名れハ

ひたりうる積たる調ん

こまげ 細ふ

くら縫のなさりれハ世の人なりけり

庶口鐮令 文選 防民之口甚於防水 史記

あなけよのさまへい

六奥 おくみつらね姉也

ひさかつにおほけくなかる 水道

けらよもりかりておりて

古今 さるゐよ夜ハ人多称けの風さやくしてよハひとりぬる

炷のはもしてんかへきもれぬめとたけさかきこつにわてこまぬめん
いとろ河もそは海つまひさい河もそくり
眦こりり 史記曰瞋目視項王頭髪上指目眦盡裂 項羽本紀
佯瞋・遊仙窟 樊噲ハいかり盈之
あまぬ天戸へこもりおはしますやめやもくらそくるぬ也ハ
古語拾遺云天照太神赫怒入于天石窟閉盤戸而
幽居焉尓乃六合常闇晝夜不分
を河君のと岩やの中ねと兄弟不和乃事を云也是秘說
あり
すけみ
いとやむく いそく 江人皇
いかりくやもくらいかりんん
極めかとくもろんらてもんしにてとおとさろやうに

絡と中經
冤さと夏にありてけるをめて乃ら実れきせし万葉統
わりたくハ耶鄭乃夏なんとのやさしさまをとき
たりとハ秋乃心膽中によひしとわりてまとりて
膽をおさへられる屋とせとつん
おうさ那との心くハ河んと
長歌事古今集より八巻始記行と云事よ八文
ふるあるる行とあり万葉集ハ三重と云事と云一統
云并一字行ハ五七文を一句として七七を一句とせりとみりき
行之と云長行短歌事哥と乃作り検まつる
せり田ん後成ハ古来風躰抄にも随之の統は心れ
川長うたん後撰にも短哥まなたりとまかれたと
毛ミうり長うたとも同事をいひあやせろと称せる

短しよめるとは旅行哥に雖一波中に崇徳院
久安六年百首の短哥といへると人皆長哥を短
哥と清輔朝臣は次一字をもちとひ式説もちとは
いはれつきもあつめらる哥を短哥とは長哥の奥に必反
哥あるをいふなり仍是れを反し短哥といふ

女郎花しはしかりてわかみく　梔 カホアヤム 河海抄

並八　蘭

巻名 藤袴乃巻やつれたる母あはれはちかしとかかれ也

内侍のかみの御文使の事

初巻には高倉にかきおくりたまひしは宰相の
中将なりきおはしけるときならす
人をうけ給はりてまかりける後にてうけ給はれる事
しり　水源抄

案ことけいは人のけしきしるしなり　咒咀 ウケハシ 日本紀
させん又日本紀摂とうけひとよめるなり摂之級
いみ嫌てうけひくをはいふ詞なりん
水なかは親をる事と秘蜜はりかわんとうちをひけれとし
色は思ふんて
こゝのおとゝの御かんしゃ　忽然 日本紀
けりてそりんけれちけむやさ給へり
譴 日本紀　謀　讒 ケサヤカ 冷竟
色しきし　態と
うすきにひいろ乃御衣　為祖父　祖母服也
宰相中将はおかしいろのいますこしこまやかなる直衣
姿にてえつましきまへる
こまやかは　濃色也　服の浅深は志の厚薄によるべし

きこし氏物語にて人のりとしてかゝる事なり。

巻纓 月 着服乃儀之

かの形ちはわりしも乃ゝかさらい 玉鬘 朝顔(アサガホ) 万葉

(旦)ひなわけてつきさかれしに流をたちきりにけりけん

着ふかいてわさくはつくれのゝ紅葉ゆき紅葉をや也

こもやにきさしは 子細(ココロヤカ)

大ろふかうへそさせあへさうし乃はて

出河原 糺河原也

おもしをはなしきとらわり

労 水原

東の扇わりん上臈ゑき孫ららくしきとも

らうたきこしいつ内事也

中ねもりぬいとつませのりんまうんかりみれ

三條実みは服と玉鬘君くりしきさ波と人よ深

祢く気てせていおりしをくれとや御中ねてさわれ

ぬきとてそんへふし抱しさと思かなんうらいたれ

や

このわりし衣は父みくいえらおり人たまへてまいり

られと

氏祖母乃着服ねくは内大臣の子息忌まてすきとや

志るよ乃もののいとおりゝさと 紫蘭

うつるよ忌とりてそりは

らやへらつを同絹やそてましていなや

同服て安内や深すうちたる母わかれともかしとそうりし

玉鬘与タ夢共よ祖母乃服よ居つ里てうちんな

みち乃をそするとや

おほぢの左衛門ぞうひらち菅原ともりちかうんと號忠
いまだおさなきときははゝにそひて
まなびけるはいまだにしておほくまなびけるに
かのつたまもりなるみつおほやけにもちひて
野がのかたこにほとはつ上とみえけりまた
これぞ文つくるとなづけたり
淵シフル　なふくるや
文殊の忠(ミ)[illegible]らんそ
練　練習の事也
女はちはまだ十ばかりなるにおほえけん
三従　婦人従人也幼従父兄嫁従夫夫死従子 礼記
なりてとたんてあはれなるひとのあんまは
決方とたんとてさき此幼嫁[illegible]よりてへなるて

[illegible]事也
おほかたのみやつかへならぬ(宰辨)さんてはおほしとききけらわん
よおほかたとしもかうすうつは　安緒(?)
心ろせのくすりくは　従日華記　貸日便
よるのくなきとせんよりしても紀年なれん
（六經）てもるとて音樂の譜とせる用て人の心をいふてたのまん
双中物の心とちぐてもの事は紀さへば無名を
俺　浩浩　撃日　棟日
月のかき夜のちかりもなくみれて
月中有河 そこに桂樹ある五百丈下有一人所樹
姓呉名剛 若對 文西河人也年十六ニシテ修仙也生ナリ　兼義
無きぬなと人も傳ふるはことこの事なれとたのりく號
[illegible]けるとて

君せこか兄弟文給来生まゐ了国　赤坂家子也

きこおりてよ給へ入て

山ハゆと申也　惠と嘆の事とすなと

志もつくるとや々の人とこそ　下侍

いりせ山のきおちいれは露出ておもとしの橋をわたしまひける

いりせ山とハ四季の妹兄とかゝりいもせとなり御中

ね玉髪を日来ハ兄弟の名といふ志ても思ものと没

搖いひるゝめ中よさふ事も侍らん

よき人志て

君とまりいりせの山の妹れる多ありもりの山花さけ

たちてあ事よいふまる事も侍らん今まぬ海

はなれきれえ　み人志らて

山事も紀伊せの山中にまる逢ふきる哉嘆出た所

紀伊国よいりせの山とて吉野川の陽てありとそ

万葉ニせ(背)の山よ向ていもりいりせ山(妹の)おきを(言)あはせて(許)も北にある(橋)

又ニ(大臣貴　少彦名)おほなむちすくなひこなのつくりたるいりせの山をみまいふる志と

みちのくの[illegible]橋やあなもわう怖まとこん侍とぞ

よしあね志侍らんと

住吉とのまゆをもおいすか会ね家事とぞ

やしらつりてあいくこんとそたらふ

志こうと　志らん

二乃大ね東文の女御乃ほたうの挽おりけり

義香殿女御

れおわひことよ

大君　嫡女ハ大文夫殿之業平卿の女と同院大君　同院ニ志と集ニおり

知かつもらく山ふていまて　姫　君姫んや

清少納言枕草子にもさ侍しこゝち[illegible]
きはし
かくれなきハひとへにせまし七月は余りとくうちなりぬき
九月とハ世俗に謂文玉鬘の巻に季にいそしわる
されし撫子のめでたしいて十月にも内へつけと
兵部卿宮 定らずしまハ九月は余りとくうらし也
朝日さすせんとかんてさむちての葉にも露しけきをそしのゝるも
たいふの監 左とて 篠の小笹露よりし独ねの床を抱に吹さわけつ
左とて 忘るむしつさハのんけくまにぬしてもぬ思ふかな年
玉鬘 兵部卿宮の返し 忘れてもなきむすひとつにさとくをやまや
傾心比葵藿 朝夕奉尭曦了 百詠
蘘荷依陰 葵藿向陽 緑葵含露 白薤負霜

葵ハ日をむかへて葉を傾て根をとらくせ抱也
鮑牽為猶侯刖足 孔子聞曰鮑荘子之智ハ不及
葵 ニハ 能衛其足トモ云ヘリ
並九 披 柏
今はとてやとれねこそ[illegible]の柏ハよもさるか
山の[illegible]とし毎におりとしすへていてくすけう
石山寺 左近江国滋賀郡
聖武天皇の御宇 金鷲仙人建立こと
河おの物語とし帰りてきぬきとしこ此寺を参
しるてふまもすとをいてつまさきてそさすつる
多 果紀 妻女同
むかさ紀人のたのようでもしかんもいつれなん
むかさ紀人とハ鬚黒乃大ねの事之ありける也て

一ひかおもしろきよきすくろまの人とえて有術他ゆき
きとくこしらへ人とハ正直にて仏神のうもかへき
まや無なく実ハんあくとく入り或本ニハ寺とりんも
あひりりんりとわつて義ハ都遠わるへ人々と仮派式（まけかきのこと）
あとよわる進りんりしとあり
きしきいと（寂）二つあく　儀式（言）
あうろ海そ有そあく
平　早ひ　圷（おん）　拷　論語　蝪（坤）　同語
かかりひう　閑　当ち　側
わろ川きれやうふも　謡（アツテ）　淡付
志を月よ有りぬ神さ明と志きく

十一月神事

一日供忌火御飯神祇官始供御贖上卯日相嘗祭

賀茂斎王還宗像祭　明日斎院神楽
上巳日山科祭　上申日平野祭　同日春日祭
同日　杜本祭　同日当麻祭　上酉日梅宮祭
同日　率川祭　同日当宗祭　同日松尾祭
同日　中山祭　中子日大原野祭　中丑日園韓神祭
当郎中刀日鎮魂祭中卯日新嘗祭今暁大殿祭
中巳日春宮鎮魂祭中申日吉田祭　同日大极殿祭
同日吉祭　下卯日東三条神楽下未日臨時祭試楽
下酉日　賀茂臨時祭　同夜御神楽

女ハまらてにふきつしく

和　饍

（饗）とこ一もて志きこさ故よ　貨と　御らやまふんく
ありふらてくミハみなとしうきりかハ人のせとて（将）ありて此りと

後撰 後仲
なき人のわたるてふなる渡り川ありとてもなほわれぞ流れん
三途川也 或奈川ともいふ 十王経に見へたり
みつせ川はこのわたりにてはたへ洞のみちにはいかゞときこえなん
地獄絵をみてよめる
みつせ川ありさるなりけり何に我がとゞめてくらん
水涂(ミツセ) 日本紀 水尾 万葉 識
みつせ川はきこえたるとなりてひき統ふりひきたなほひき
しらんとむかしあるにて
善道なりといふ渡り川亡人必三悪に趣
一説に過路(ミキン)亡人必此川を渡るに依ひて宜きあとを
いふ 又云善道中に冥途へおもむく中
なれども十王経の文に二七亡人渡奈河更に
あるといふ 善悪乃義をいふなるらん

或説云此川はひきわたりはひきたをわんとあり、寛神に
嫁合の女必此川をひきこすといふ説あり此義たすらん
源氏にても玉鬘を本意とおもはぬ人に志あるとて
の文なきより下に見てさりもつうへには隠蜜乃
ようにて人こは見ずとしかしとて心をは中は此川にわたる
事もわらんずし世にあきたなきくし何もわらん絶
うわやむてきこれ世をたのひかさとありめたれて
女乃ためといふとも例へに大ねをむこにまりわたり
わやきて親にわらん定家にはきせあてありふいさ
ひとつのわたりといふはむしろ川や契たるへき義とれ
ん女にて色説にわたるを讀へしこれは六條
また女かたりなりといきていふにあるとれたちはられし
水納りけらん玉鬘の所によみつせ川にわたる事よ

おそしきてんとわらと源氏この川とよまれもしきみ
ちちりと（従之）
玉鬘尚侍通鬚黒大将事
尚侍後ニ内大臣高藪女通ス大将室通花ホ侍ん
とかれ物とらし（傾）しえそて
かやしうちー称されれ物乃まてまよ
今まて居さしうるしー 居さしハ恥しきさん
汀つてハニ為ハカニに家ハわしと君と居さし志ニ河ハ侍（おりき）
気小とちそ男丸後よ老女ふん〳〵のおもひへと抱居さし（き）
むされいくて
理痛ー
きやうり 儀のらんとさ 我東抄
楽しきハとなりとひふやたる手にたく〳〵ハ善悪
分明なる称也

ゆかしうとたちで おもひ人也
大和物語ニこのさいしあ乃ハいさしとよいせのちるそ
いはをりけりかゆとりふかをぬめしとのまそわり
けり
蜻蛉日記ニとりて家乃ゆかしうと（云）
日本紀ニ宮人（メミヤシナ）生男女各四人
男ハをハお得きをそまりし
餅 おけちりとひふなん 毫（おケ） 從語枝又ハおほくそちらん
いとけなわやうたなる人乃
細（サヤカ） 許 極細密 サニ捷
ひとつそ あへし 月ニ字之
かく苗乃くよわりくてんも もしひ火つくりて
日本紀第七ニ賊乃敖ニ晴（玉渭日本武尊）敖天焼ニ野

王ニ被断則以燧出火向焼而得免
日本武尊駿河国にて東夷を征し給ふ時賊徒
野を焼しにある草薙剱にて草を刈て向火を焼
給ひし人のうへならぬ事をこゝろにも封して
腹立ちらん心と云ん
夜をかけぬかりと
忍ひし給ひしハそれか極人白雲わかれ行のよそなけれハ
ひとりみるよきハおもふさんことを
えりうきうりしぬるか袖から
袖のこほりとけぬらんハ今しなきやに
思つて寝るよのひとつ衣ハ袖の水のけすまゐ
おほきたらこれまてあり川の火わりとけりて
たき地ハ乃雲て焼たまる我ひとりとハ志のすくしやハ

人乃や人わかか袖もぬく
されしまれの夕さきみてわかれて
更闌 日記
きすしまりあへり　木旋　や微也
花の宿よりとれ宿ともにしけり三たかりてわのさて
後撰　宮のうちにかりけり女房をまつりけり兼茂朝臣
と湛て元ちよらてわか宮ハ桃花ふ人の形をこかりけり
花の宿よらそれぬ梅の夜ハわかきこゝの香りて梅風
たもしやきよくハあへ見えて
実はよりぬしてさん
ねまちしますハ着まゐて志ろき衣を
志くぬりとハ合期志てらんこ志てつたまうしろ高
ともせりこせは合期せよとりめて

えらひ出してはおほやけに奉れし

塩　老子　うとむなと

まんいとゆへ　傷

らうきんはなりぬべきもあなかりと

中間やうてふとつゐん之　二孔中肩ぬくえん

あら南にあらて　云骨

あとなし　云面

ひとつかたはなとうさきひとつは道のつら人とはあ君

いこれりとゑかしたかれなし

武のこ海のまうり所けれはなりくなりあひ尤

ひとつ文なりとのうるね

檢皮文

ただそれやとしひ尤をしたがひき鞍のいて鴉のつきはてちら我さとかうや黒文也

被柾　異說　槙　素柾

歯き柾作も凡人からあかりかのさき田あらりけるか

二いわとらへき時屍を作くわくの迄ぬべきんむら

くりまて捿又り人なけり

枹達　君のしも屋との檀を極くこかくるまてまへりらいや

顔　二音　木古里　文選　別賤

かそたきてよ正ろしにやきむて多ていふりれもしわさま

うるとしりんて

歒　史記又歒　論語　雖歒　仇史記　讎　冦　文選　文選

為のしわふ大ちん乃

木訛式戸　わりとまれおりしぬ武秘めつる和大ろ極と人のけさい

つらた大支兄人ともゝ今にさを百らろ此祖我てもたはてとそう

とれもみすいふり

蛛とハ我か学しわたく人の我をよりせん気学文るを
世よ子もつきしまなりぬらひとゝと
さおもりなしまみせぬ不幸なりたるによつ
これ作り乃名ハうくそ
今生 面目 式ハ文武のよ五十歩せられしす
この大小事うされ地なりける 悪 日本紀
作りしこハ志のひきてつまきハく志きんのん古紀りのを
ひきてつまとハ ひきりつゝ紀ん
おとまひのさしぬき
青絶指貫 大内裏非違使別当着之
わことらハ忠しきれうしこみるも
吾子 日本紀 我子 吾子
吾子は文なとしけん然やしかとききてしお

おうやと人むらんたのそりうろハなくやいのちふ
磨女 尚侍太政大臣忠成室 尚侍淋子中納言長良女 太政大臣氏宗室
文女御
朱雀院女御 式部卿文女 母同披極上
是ハ形り八郎き乃人ハむすいり
菌服 不入京曲
おかしこととめや
ミけむまや 水驛 飯驛ハ水きりし記食之 水驛ハ中うきくろ食之
ひけさしうちて
作をんひわぬ世の形とうらうけきて
せりけう昔の人て我とやんひまの形られハさりきん
大ねハつきの作り作りしそハおりしける
天暦四記云依太政大臣室中宮太子移于近衛府日

・老齋光柏見還来申大納言書司中務書司先世を
侍少納言書司屋頻随経随自他唐之侍臣従則一令
加階理侍書司　后宮ホモ職書子司有之定　子皇后
宮生之宗給之時母后依之鬼物但旅給之時去重門
これは職書司式桃柄以下云以宿所也且天長大納言緒
司請太大臣并書少方号造体居之　抄忽之時或為
御所
・西宮抄記之　宿所大臣　納言　宿所職書司之
一大臣宿在宜陽殿東廂左大納言宿所在宜陽門内
廂南太大臣宿所在陰明門内南廂大中納言宿
所在玄輝門東面
又山本は相人ゆかりのなかとなく孫々ここ長ゆませ
源氏山本に髭黒大納言をたとへ侍る　紅葉賀以中務を源

此中務よりまかりては右大弁の子のやうにて山本をいふ
これは玉鬘内侍督をたとへて又山本と左大臣家也
相人孫すゑしるし
あつるにみて世にめづらしく
りたちさるにたちかへり傾ふ物とこそは
かくれあらいふなしおきてそ子のおとゝの作も
たてまつらせ
けんいかとしくて人の国にもとしてわかれらは
相ひきくひよりきこえてしも日本紀よ敢聴けれは
いとよめる相人いかにわん
みそこもわかいまさ宮をもなめく おりひらかん
宮のいひすて相とつかひの孫ちかきにかひことみえし
・宮よやむなき相人なる前朝花池よひさを相人して見ける

思ふ事なんとおもひ給ひて此人をとおりゆきうち思ひける
あしたより文遣しきけるを

深　黒　濃

文にも人の身もしらてありしかハ思ひあへらんや

姑三位　加階ん

けふまでうるさいうらさそへきうせあらりと

或曰　凡娶家人為妻者容隠和合ニ背出仕條ニ科

罷

へりちきまするやうにさしてのことおもはれてもうしききとり
あさりふよあたりしのなかにけきりてはへきんもらうん
ありけれて

後撰　大納言国経乃家ニ侍ける女ニ平定文
忍ひてかたらひて行すゑまて契侍けるに此女俄ニ贈

太政大臣ニむかへられてわたり侍りけれハ文たにかよはすかた
なく成にけれハかの女乃子の五つはかりなるか本
院のにしのたいにあそひありきけるをよひよせて
母にみせよとてかひなにかきつけ侍ける　平定文
昔せし我かねことの悲しきハいかに契りしなこりなるらん

返し

うつゝにて誰契りけん定めなき夢路にまよふ我ハ我かは
春の風に吹そよむ乃梢よ来る梅の香き句をこゝとも
いとみえり世乃方やまし　粉と
乱心地　同事ん
えよりえひあぬ人の　不進退
女にあやて梅乃香ひきけることをおもひわするゝ心
そ梅乃おもみ塩尾て焼風とこそ

ちはやふる神の志はくは神あまてらすの御神と志の給ひしや

未必

式（ウタカタ）

（万葉）大船のたゆたふ山の本にかくしあらば今は逢ふとも思はざりけれ

（万葉）何事をいふも志らず何ゆゑに恋をうきことゝきさけておもはずや

（日本紀）鶯の声のやまずなきつらむ思ひてまちてむちておもやし

（後撰）忍びてもあらむ水の流れのうきて今はあはでやみなむや

楽之師の説云

うたかたとはうき詞也或は水の泡のことゝ也一説ささめ

ぬれきぬ又あてどもなしとも云也　水泡抄定家云

うたかたとは泡の字を宮中にて詞の様に思

ひ出といふもはかなくていへる詞と云ふ也しかれとも

字一をみてうきたる人とも云ふはかなき人と六字よ

つけてあれと云説ありてあをるりかのへ

宮の説に字もて文字の詞也

思ふはさきて波の上にうかべりはかなきを喩ふ也　雅物

式道祖師云也凡是旧也

源氏物語にあるかなきこと　やくとくさきぬかな

やくとくとわかの詞にうちいたりけむか

思ひあへけふつきてはかり絶えけりあるかなきこと

君か代に法の庭には雲の上のうき

るや（ややくし）くるき流くり

恭　尚書　礼　日本紀にやまふんき

なりあひの夜はやかにおほはさるゝと

夜やさぬ水の玉の数よりて恋しき事はさすらへる

流れもせきとめて玉の流れにまじはりてお流れ詞

わすれぬ志へとするをそなきには有りうきなむを

まひめふ
手志多加戸云加毛作戸安井波良乃伊介
乃世多万毛波万祢奈加利曽比毛須加祢や万
祢奈加利曽や　風俗上聴す

わりもいれ日きいはもてこおとふくもたまらむとよれし
立てこひわてりそ思ふ紀もこうゆうもこれひさこのかもこと
わこの歯よ世のゆりすしよ歌二云ゆりの山も我よ塩ともゆん
父よこゆかもおみと乃ゆひて
こころ歌りみよ衣なおねまして色乃いは世よ常なりなくり
くちなし衣よ衣と我なりけりいふそ色よ梅とよう思へ
思ふすいはて出まみち漏こいいそ我出乃匂す吹の紀
山吹と宿ようてい見ん乃とよ忘いやまぬて出いとうさきし
あちきなくいまよりやまつきてとひとりやわての山吹の花

大和玉鬘乃上にかりなれうちら山吹乃色よさかよ
我へゆりうし示とまかてくり玉鬘は美人の文への
きみくらりかさくなりのくいのきし山吹の色よおうちと
こえいやせりいとわり又歌いう胡のわさうかそて山吹
乃さ紀とれりさうりよ雲ゆりまゆる夕ゆへよたとへり
似てくとし涼氏まれおまへとらひそてむかうま
とまりてさし色をとりて而我ひつて忘出路ふや
彼乃見てはらむまそのかうし
いふ又同とてら相よくちなりの冬やたへし山吹の紀
北条敷云北指純宗ん同まへの山吹の色の心
まみてわれよ我へられなん
第し　人丸集云
夕さ道いのへよなりてまふりそらおれよかへてはるは見さきつは

かもめこそいとおほろなれらんして よし

鴨子　西宮記　献鴨子平安産ノ時子としてり

うつほ物語にありて宮と同じくて宮産ありけて

源氏　ひたちよ命婦はかてのこは君の宿にてうさぎめん

おほしきにひりくひ見てぬかいかなる人の見てまめきらん

おほえられてきれし給

貞文日記に伊勢の家に雑色あまた集まりきちかきやこそ

又あはれ文ながく人の人もことにいたこうはかなる

よおほしきうれ給へし

わか紀平のかひてんと

奥

奥津母より浪渡よりて伊勢の家へ来てまちる

見る人かなきや読に出しさかきてまちはさかなつり毎

今も都しとよむこきくわりは誠にしくとや

ほりにてたかしと毎に記さりおなしくとや思

ひとかき